

# 『破戒』に見る可能表現についての一考察

林 綺 雲

國立政治大學日本語文學系教授

(收稿日期：1999年1月8日；接受日期：1999年4月13日)

## 摘要

### 關於『破戒』中“可能表現”之探討

本稿以夏目漱石之作品『坊っちゃん』同時期所寫的島崎藤村之作品『破戒』為例，探討該作品中“可能表現”之「れる」型、「られる」型以及「可能動詞」型的使用狀況。

本研究得到的結論，與先前筆者對夏目漱石之作品『坊っちゃん』的研究，結論是一致的：發現了甚多足以啟示由使用“可能表現”之「れる」型，移轉到使用「可能動詞」型的例子，也發現了即使移轉確實在進行，但仍有少數的“可能表現”之「れる」型，照常的被使用。

但是否這就足以推斷，明治末期的作品都顯示出相同的移轉趨勢呢？作品個性不同，其間必然會有差異性存在吧？此課題將留待日後探討。

關鍵詞：“可能表現” 「れる」型 「られる」型 「可能動詞」 移轉

## 一 はじめに

動詞に助動詞「れる」「られる」の付いた、いわゆる受身形の「行かれる」「言われる」「考えられる」などは、受身のほか、可能及び自発、さらに尊敬の意味を表すこともある。これに対して、室町期に成立し、明治中期ごろから多く使われるようになった「行ける」「言える」「読める」などの一連の動詞もある。これらの動詞は、「行く一行ける」「言う一言える」「読む一読める」のように、五段活用の動詞を下一段に活用させるもので、もっぱら可能を表す。故に、「可能動詞」と呼ばれる<sup>1</sup>。

本稿は、可能表現、特に五段動詞における可能の意味を表す「行かれる」「言われる」「読まれる」などの形（以下「れる」形と呼ぶ）と「行ける」「言える」「読める」などの「可能動詞」の形（以下「可能動詞」形と呼ぶ）に焦点をあて、両形のかかわりを考察するものである。

本稿の分析に使った文学作品は、島崎藤村が明治39年3月に発表した長編小説『破戒』である<sup>2</sup>。『破戒』から助動詞「れる」「られる」を伴っている動詞と可能動詞を抽出し用例としたが、受身と尊敬の意を表す形は研究対象としていない。ここでは、可能と自発の意を表す用例のみに限定し、「れる」形と「られる」形と「可能動詞」形の三グループに分け、それぞれ 103用例、83用例、138用例のなかで分析した。

<sup>1</sup>橋本進吉氏は、「可能動詞」形は室町時代から見えるもので、可能の意味を表すほか、「さうは思へぬ。」のように自らおこる意味をも表し、さらに敬語にも用いたらしいと述べている。橋本進吉『助詞・助動詞の研究』、岩波書店、1969年、273頁。

<sup>2</sup>引用は、現代日本文学大系13『島崎藤村集（一）』、筑摩書房、1968年初版第1刷を使用した。

## 二 可能の意味を表す「れる」形

『破戒』では、「れる」形 103例のうち、「可能」表現は72例、「自発」表現と考えられるものは22例、その他 9例は「自発」の意を表すが、「可能」とも「受身」とも解せるものである。まず、「可能」の例をあげると以下である。

1. 『……左様すれば、口は減るし、喧嘩の種は無くなるし、あるひは家庭が一層面白くやつて行かれるかも知れない。……』(240頁) 他 2例。
2. 『『頼む』と言はれて見ると、私も放擲つては置かれませんから、手紙で寺内の坊さんを呼寄せました。……』(132頁)
3. 其晩は遅く寝た。過度の疲労に刺激されて、反つて能く寝就かれなかつた。(103頁)
4. 人種さへ変りが無くば、あれ程の容姿を持ち、あれ程富有な家に生れて來たので有るから、無論相当のところへ縁付かれる人だ——あんな野心家の餌に……。(101頁)
5. 河原の砂の上を降り埋めた雪の小山を上つたり下りたりして、躊躇船橋の畔へ出ると、白い両岸の光景が一層広闊と見渡される。(144頁) 他 4例。
6. 『放逐して了へ、今直ぐ、それが出来ないとあらば吾儕挙つて御免を蒙る』と腕捲りして院長を脅す……。いかに金尽でも、この人種の偏執には勝たれない。(35頁)
7. あの夢見るやうな、柔嫩な眼——其を眺めると、お志保が言はうと思ふことはありありと読まれる。(140頁) 他 3例。
8. 丑松は…眺めたが、其時はもう牛小屋も見えなかつた——唯、蕭条とした高原のかなたに当つて、細々と立登る一条の煙の末が望まれるばかりであつた。(78頁) 他 3例。
9. 『……御存じでせう、其穢多が皆さんの御家へ行きますと、土間のところへ手を突いて、特別の茶椀で食物なぞを頂戴して、決して敷居から内部へは一步も入られなかつ

たことを。……』(154頁)

10. 寝床に入つてからも、丑松は長いこと眠られなかつた。(87頁)他 3例。
11. 『……其や是やを考へると、我輩の口から娘に帰れとは言はれないぢやないか。……』(126頁)他 2例。
12. 『さうさ、過失の無いものに向つて、出て行けとも言はれん。……』(42頁)他 1例。
13. 『……斯う薦や荐などの纏絡いたところを見ると、我輩はもう言ふに言はれないやうな心地になる。……』(57頁)他18例。
14. ……。と不図、省吾から來た手紙の文句なぞを思出して見ると逢ひたいと思ふ其人に復た逢はれるといふ樂みが無いでもない。(100頁)他 1例。
15. 父の存命中は毎月為替で送つて居たが、今は其を為る必要も無いかはり、帰省の當時大分費つた為に斯金が大切のものに成つて居る、彼是を考へると左様無暗には費はれない。(126頁)
16. 斯ういふ可愛らしい相手があればこそ、寂しい山奥に住まはれもするのだと、人々も一緒になつて笑つた。(77頁)
17. 『哲学者でもなし、教育家でもなし、宗教家でもなし——左様かと言つて、普通の文學者とも思はれない。』(138頁)他17例。
18. 『どうも彼処の家は喧しくつて——』斯う答へて丑松は平氣を裝はうとした。争はれないもので、困つたといふ氣色はもう顔に表れたのである。(47頁)

以上「可能」を表す「れる」形72例のうち、23例が会話文、それ以外の49例が地の文で使われ、72例中の53例が否定形をとっている。『破戒』において、「可能」の「れる」形は地の文で多く用いられ、打消の表現として使われる傾向が見られる。

そしてこれらは、13. とその他18例の「言ふに言はれない(言はれぬ)」のような慣用句

### 『破戒』に見る可能表現についての一考察

的な表現を除いて、それぞれ対応する「可能動詞」形の1. 「行ける」 2. 「置けません」 3. 「寝付けなかつた」<sup>3</sup> 4. 「縁付ける」 5. 「見渡せる」 6. 「勝てない」 7. 「読める」 8. 「望める」 9. 「入れなかつた」 10. 「眠れなかつた」 11. 「言へない」 12. 「言へん」 14. 「逢へる」 15. 「費へない」 16. 「住まへもする」 17. 「思へない」 18. 「争へない」に置き換えることができる。なお、15. では、「費つた」に「つか」と振り仮名をつけていていることから、「費はれない」は「つかはれない」であり、「使ふ」「使はれる」は『破戒』では、漢字「費」をあてて用いられていることがわかる。ところが、「使ふ」の「可能動詞」形の「使へる」は、「42. 使用へる」と表記していて、表記(漢字)の違いによって「れる」形と「可能動詞」形を使い分けている。これについては後にまた触れたい。

「行かれる」は、前に調べた同時期(明治39年)の作品、夏目漱石の『坊っちゃん』<sup>4</sup>で本動詞として用いられている19. と異なり、『破戒』では、1. の「行かれる」は「一層面白くやつて行かれるかも知れない」と補助動詞として用いられている。他 2例(20. 21.)も同様に補助動詞として用いられている。

19. 此住田と云ふ所は温泉のある町で城下から汽車だと十分許り、歩行いて三十分で行かれる、料理屋も温泉宿も、公園もある上に遊廓がある。(「坊っちゃん」69頁)

<sup>3</sup> 『現代日本語の表現と語法』では、五段活用動詞については一般に「可能」の「いかれる」「とばれる」などを「いける」「とべる」とできるが、「ねつかれず」は「ねつけず」となり得ず、例外と見なくてはならないと述べている。佐久間鼎『現代日本語の表現と語法(増補版)』、くろしお出版、1983年復刊、214頁。

<sup>4</sup> 林綺雲「可能表現についての一考察－『坊っちゃん』の場合－」、『日本語文学国際会議論文集』中華民国日本語教育学会、1998年、127-146頁。

20. 『……そこがそれ情ないことには、今の家内がもうすこし解つて居て呉れると、奈何にでもして親子でやつて行かれないことも有るまいと思ふけれど、……』(126頁)
21. もし奥様の決心がお志保の方に解りでもしたら——あるひは、最早解つて居るのかも知れない——左様なると、娘の身として其を黙つて見て居ることが出来ようか。と言つて、奈何して彼の繼母のところなぞへ帰つて行かれよう。(140頁)
2. の「置かれる」は、補助動詞として用いられている。
5. とその他の 4例(22. 23. 24. 25.)の「見渡される」は「可能」の意を表すと同時に「自発」の意を含む。
22. 式場に集る人々の胸の上には、赤い織色の綬、銀の章の輝いたのも面白く見渡される。(61頁)
23. 灰色の雲は対岸に添ひ徊つた、広潤とした千曲川の流域が一層遠く見渡される。(99頁)
24. 障子を開けて眺めると、例の銀杏の枯々な梢を経てゝ、雪に包まれた町々の光景が見渡される。(150頁)
25. 対岸に並び接く家々の屋根、ところどころに高い寺院の建築物、今は丘陵のみ残る古城の跡、いづれも雪に包まれて幽かに白く見渡される。(166頁)
7. とその他の 3例 (26. 27. 28.)の「読まれる」は「その意味が理解できる」「心がわかる」「さとる」という意味で、「可能」の意を表すと同時に「自発」の意を含む。
26. まだ灯を点ける時刻でもあるまいに、もう一軒点けた家さへある。其軒先には三浦屋

『破戒』に見る可能表現についての一考察

の文字が明白と読まれるのであつた。(46頁)

27. さすが心の表情は何処かに読まれるもので——大きな、ぱつちりとした眼のうちには、何となく不安の色も顕れて、熟と物を凝視めるやうな沈んだ心も有つた。(100頁)

28. 『あ——ちよつと、筆を貸して呉れませんか。』斯う言つて、借りて、赤々と鮮明に読まれる自分の認印の上へ、右からも左からも墨黒々と引いた。(122頁)

8. とその他の 3例 (29. 30. 31.) の「望まれる」は「可能」の意を表すと同時に「自発」の意を含む。

29. たゞ一際目立つて此窓から望まれるものと言へば、現に丑松が奉職して居る其小学校の白く塗つた建築物であつた。(35頁)

30. 次第に道路は明るくなつて、ところどころに青空も望まれるやうに成つた。(88頁)

31. 天気の好い日には、斯の岸からも望まれる小学校の白壁、蓮華寺の鐘楼、それも糸の空に形を隠した。(166頁)

可能の意の「言はれる」は、独立動詞として用いられているのは 11. 12. を含めて 5 例あり、「言ふに言はれない」のように慣用句で用いられるのは 13. を含めて 19 例ある。慣用句的な表現 19 例のうち、13. の「言ふに言はれないやうな心地になる」のように口語的な「……ない」の形をとるのは 1 例にすぎない。この 1 例は、比況の助動詞「やうだ」の連体形「やうな」をはさんで名詞(「心地」)に接続し、会話文で使われている。残りの 18 例は、共に 32. 「言ふに言はれぬ不安の光」 33. 「言ふに言はれぬ悲しい心地」 34. 「言ふに言はれぬ心配なこと」 35. 「言ふに言はれぬ愉快」 36. 「言ふに言はれぬ感激」 のようにや言はれぬ心配なこと」 35. 「言ふに言はれぬ愉快」 36. 「言ふに言はれぬ感激」 のようにや言はれぬ心配なことに用いられる。この場合、「……ぬ」の形をとって、「〔名や古風な書き言葉的なものに用いられる。この場合、「……ぬ」の形をとって、「〔名

詞」の」や形容詞、形容動詞の連体形をはさんで名詞（「光」「心地」「こと」など）に、或いは直接に名詞（「愉快」「感激」など）に接続し、地の文で使われている。

32. 深く澄んだ目付は以前の快活な色を失つて、言ふに言はれぬ不安の光を帶びて居たのである。（36頁）
33. 『あゝ、お志保さんは死ぬかも知れない。』と不図昨夕と同じやうなことを思ひついだ時は、言ふに言はれぬ悲しい心地になつた。（143頁）
34. 言ふに言はれぬ心配なことでも起つたかして、時々深い憂愁の色が其顔に表はれたり隠れたりした。（102頁）
35. 沈黙つて居る間にも亦た言ふに言はれぬ愉快を感じるのであつた。（80頁）
36. 斯ういふ父の臨終の物語は、言ふに言はれぬ感激を丑松の心に与へたのである。（75頁）

『破戒』には、次のような例も出てくる。37.～42. の 6例は「可能動詞」形であり、43.～45. の 3例は受身の意味を表す「れる」形である。

37. 『これは驚いた。盃をくれると仰るんですか。へえ、君は斯の方もなかなかいけるんだね。吾輩は又、飲めない人かとばかり思つて居た。』（124頁）他 1例。
38. 上の渡し近くに在る一軒の餼飴屋は別に氣の置けるやうな人も来ないところ。（145頁）
39. 飲めば窮るといふことは知りつゝ、どうしても持つた病には勝てないらしい。（49頁）
40. 簿笥の上に載せて置いて行つた手紙は奥様へ宛てたもので——それは身心籠めて話をするやうに書いてあつた、ところどころ涙に染んで読めない文字もあつたとのこと。

『破戒』に見る可能表現についての一考察

(143頁) 他 4例。

41. 『はゝゝゝゝ、君は直に左様怒るから不可。なにも君だと言つた訳では無いよ。真箇に、君のやうな人には戯語も言へない。』(121頁) 他13例。
42. 有力者の家などに、悦びもあり哀しみもあれば、人と同じやうに言ひ入れて、振舞の座には神主坊主と同席に座ゑられ、すこしは地酒の飲みやうも覚え、土地の言葉も可笑しくなく使用へる頃には、自然と学問を忘れて、無教育な人にも馴染むものである。(41頁)
43. 読めば読む程丑松はこの先輩に手を引かれて、新しい世界の方へ連れて行かれるやうな気がした。(39頁) 他 1例。
44. 賢いと言はれる教育者は、いづれも町会議員などに結託して、位置の堅固を計るのが普通だ。(41頁) 他40例。
45. 何か彼放逐された大尽と自分との間に一種の関係があつて、それで面白くなくて引越すとでも思はれたら奈何しよう。(45頁) 他10例。

37. の「いける」は、「酒が相當に飲める」ことを意味し、佐久間鼎氏の言う性能を述べ評価する「価値」である<sup>5</sup>。後に「四節の（三）」でまた触れるが、これは、「行く」の可能動詞形「行ける」から転じてきたものであつて、可能の意を残しながら別義を生じ別語のように意識される場合である<sup>6</sup>。このような場合の「いける」は「行く」の「可能

<sup>5</sup>前掲『現代日本語の表現と語法（増補版）』、216-221頁。

<sup>6</sup>鈴木丹士郎氏は、“可能動詞と自動下一段動詞が同一形式をとる場合が出てくる。「ここでは鮒がよく釣れる／女にでも魚は釣れる」、「上着のボタンが取れた／指定席が取れた」、「手料理だけれども、けっこう食える／煮ても焼いても食えない」など。ある

動詞」形と見るよりは、一語の自動詞と見る方が妥当であろう。

38. 「気の置けるような人も来ない」は「気遣いする必要がある、打ち解けられないような人も来ない」という意味である。現代日本語では「気の置けない人(=気遣いする必要がない、打ち解けられる人)」のように否定形「気の(が)置けない」と表現するのが普通である。こここの「気の置ける……」は、「気の置けない……」という慣用句的表現が定着する前の古い言い方であると考えられる。「置ける」は「置く」の「可能動詞」形である。

39. 「勝てない」、40. 「読めない」、41. 「言へない」は、それぞれ「勝つ」、「読む」、「言ふ」の「可能動詞」形の否定形である。42. 「使用へる」は、漢字「使用」をあてて用いられているが、「つか」と振り仮名をつけていることから、「使ふ」の「可能動詞」形「使へる」であることがわかる。

1. 20. 21. の「行かれる」と37. の「いける」とでは、意味に若干ずれがあるため同列に論じられないが、15. 「費はれない」と42. 「使用へる」のように、表記(漢字)の違いで「れる」形と「可能動詞」形を使い分ける表現は興味深い。

意味のずれや表記の違いはあるが、1. 20. 21. と37.、2. と38.、6. と39.、7. と40.、11. と41.、15. と42. から、同一作品中で「行かれる」—「いける」、「置かれる」—「置ける」、「勝たれる」—「勝てる」、「読まれる」—「読める」、「言はれる」—「言へ

---

言い回しではどちらにでも解せることになる。また可能の意を残しながら、別語のように意識される場合も出てくる。しかし、これには語によって段階さがある。a 「持てるだけ持つ」、b 「座が持てない」、c 「学生に持てる先生」などの「持てる」ではc が別語と見なされるかもしれない……”と指摘している。37. の、「酒が相當に飲める」ことを意味する「いける」はc の「持てる」と同じ段階にあるものと考える。鈴木丹士郎「動詞の問題点」『品詞別日本文法講座 動詞』、明治書院、1972年、142頁。

る」、「費はれる」—「使用へる」のような両形併用語が見出された。1. 20. 21. と37.、2. と38.、15. と42. では可能表現としての意味のずれや表現上の違いが見られるが、両形併用は「れる」形から「可能動詞」形への移行を示唆していると考えられる。両形併用 6例のうち、「行かれる」—「いける」の 1例を除いて両形に意味上の違いは認められない。なお、11. 12. の「言はれる」と41. 「言へる」は共に会話として用いられ、7. の「読まれる」と40. の「読める」、15. の「費はれる」と42. の「使用へる」は地の文で用いられている。会話文と地の文では、「可能」の意の「れる」形とそれに対応する「可能動詞」形を特に使い分けているわけではない。

43. の「行かれる」(他 1例)は受身の意を表しているが、1. 20. 21. の「行かれる」は可能の意を表わしている。44. の「言はれる」(他40例)は受身の意を表し、11. 12. 13. の「言はれる」と他21例(すべて否定形をとっている)は可能の意を表わしている。45. の「思はれる」(他10例)は受身の意を表し、17. の「思はれる」と他17例(すべて否定形をとっている)は可能の意を表している。これらは共に「れる」形の同一形式をとるので、「可能」か「受身」か、文脈によらないと意味が区別できない。まして、「自発」の意の「思はれる」もあるので、なおさら弁別しにくい。

次に「自発」とかかわりのある例をあげることにする。まず、自発の典型的な用例をあげる。

46. 丑松が胸の中に戦ふ懊惱を感じれば感ずる程、余計に他界の自然は活々として、身に

染みるやうに思はる。(56頁) 他 1例。

47. 「……まあ、僕に言はせると、あまり君は物を煩しく考へ過ぎて居るやうに思はれる。  
……」(160頁) 他 3例。

48. 嫉むでは無いが、彼の老紳士の親しくするのが羨ましくも思はれた。(73頁) 他 5例。

49. 其日は土曜日で、月給取の身にとつては反つて翌の日曜よりも楽しく思はれたのである。(43頁) 他 1例。
50. 其日のやうな楽しい経験——恐らく斯の心地は、丑松の身にとつて、さう幾度もあらうとは思はれなかつた程。(80頁) 他 1例。
51. 踏む度にさくさくと音のする雪の上は、確実に自分の世界のやうに思はれて來た。(163頁)
52. 瞳を、頬を、髪のかたちを——あゝ、何処を奈何捜して見ても、何となく其処に其人が居るとは思はれ乍ら、それで奈何しても統一が着かない。(103頁)
53. 水内の平野は丑松の眼前に展けた。それは広闊とした千曲川の流域で、川上から押流す泥砂の一面に盛上つたところを見ても、氾濫の淒じさが思ひやられる。(71頁) 他 1例。
54. 其時丑松は彼の寺住を思出して、何となく斯人にも名残が惜まれたのである。(162頁)
55. 退職の敬之進は最早客分ながら、何となく名残が惜まるゝといふ風で、旧の生徒の後に隨いて同じやうに階段を上るのであつた。(61頁)

上記の例文にあるような、「思はれる」「思ひやられる」「惜しまれる」は形態的には受身形であるが、判断や感情が自然に生じた場合に用いられるもので、いわば「自発」の典型的な用法である。「自発」22例中、文語的要素が入り込んでいるのは 46. とその他 1 例、「思はるる」の 2 例と 55. の「惜まるる」の 1 例ある。

「自発」は基本形で発話時をさすが、47. 「……思はれる」のように基本形をとっているのは、46. 53. 55. を含めて 5 例ある。48. 49. 54. のように「……た」と過去形をとっているのは 9 例ある。51. 52. のように「思はれて來た」「思はれ乍ら」と連用形をとっている

## 『破戒』に見る可能表現についての一考察

のは 2例ある。

「自発」は思考の発生を表し、基本的に肯定形で使われ、否定形はとりにくくと考えられる<sup>7</sup>が、『破戒』には、50. とその他 1例のように「思はれない」と否定形をとるものも見られる。

典型的な「自発」は話し手を主語とするが、小説などでは三人称主語が必要になることがある。『破戒』は主人公「丑松は…」という三人称の視点で書かれた小説であり、上記の例(47. のような会話文を除いて)に見られるように三人称を主語としている。このような場合、「自発」の意味を持っている根拠を搜さなければならない。『破戒』には、49. と50. のように「……にとって」が使われているものは 3例ある。主体のマーカーとして「……にとって」が使われることがあることは「自発」の意を表している根拠としてよいとされる。「可能」ではこの形式は許されないからである<sup>8</sup>。

また、51. のような、漸次変化のテクルとの共起は「可能」には見られない現象である<sup>9</sup>ので、51. は「自発」の意だと判断できる。

「自発」は形態的には「受身」と同じであるということは、前述した通りである。意味的には「可能」と似た点を多く持っていると考えられる。多くは「自発」を、自発として扱わないで「可能」と一まとめにしている<sup>10</sup>。

次の例は、「自発」の意を表すが、「可能」または「受身」の意とも取れ、「自発」か

<sup>7</sup> 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）単文編「思エルと思ワレル—自発か可能か—」』、くろしお出版、1995年、122頁。

<sup>8</sup> 7に同じ、128頁。

<sup>9</sup> 7に同じ、125頁。

<sup>10</sup> 板坂元『日本人の論理構造』、講談社、1971年、68-77頁。

「受身」か、それとも「可能」か、明確に一線を画しがたい。

56. 轄て二人は斯の炉辺を離れた。勘定は丑松が払つた。笹屋を出たのは八時過とも思はれる頃。(60頁)
57. 尤も、病のある人ででも無ければ、彼様は心を傷めまい、と思はれるような節々が時々其言葉に交つて聞こえたので。(87頁)
58. 先輩の死——どうして其様な馬鹿らしいことが細君の夢に入つたものであらう。しかし其を気にするところが女だ。と斯う感じやすい異性の情緒を考へて、いつそ可笑しくも思はれた位。(94頁)
59. 『自分は一体何処へ行く積りなんだらう』と丑松は二三町も歩いて来たかと思はれる頃、自分で自分に尋ねて見た。(143頁) 他 5例。

以上見てきたように、「可能」と「受身」の「れる」形があり、さらに「自発」の「れる」形が加わると、一層意味の弁別に困難を増すと言わざるをえない。後に「自発」の「られる」形にも触れたい。

### 三 可能の意味を表す「られる」形

上一段・下一段活用動詞及びカ変動詞・サ変動詞に「られる」をつけた「見られる」「寝られる」「来られる」「(……)せられる(文語的用法)」のような形を「られる」形と呼ぶ。『破戒』では、「られる」形83例のうち、可能の意を表すものは75例、自発の意を表すと判断できるのは 8例である。

まず、「可能」の例は、以下である。

『破戒』に見る可能表現についての一考察

1. ……天地の壯觀は心を驚かすばかりであらうと想像せられる。(74頁)
2. 丑松は立つて居られないといふ風で、……。(154頁) 他 1例。
3. ……一時も静息んでは居られないかのやう。(44頁) 他 1例。
4. ……終には其処に腰掛けても居られないやうになつた。(99頁) 他 1例。
5. 『……自分ばかり懐手して見ても居られずサ。……』(123頁)
6. 同じ人間だといふことを知らなかつたなら、甘んじて世の軽蔑を受けても居られたらうものを。(145頁)
7. 『……到底今の家内と一緒に居られるもんぢや無い。……』(126頁) 他 1例。
8. 『もし叔父さんが根津に居られないやうだつたら、……』(34頁) 他 2例。
9. 『……最早々々奈何しても蓮華寺には居られない、……』(125頁) 他 1例。
10. 『へえ——学校にも居られなくなる、……』(108頁)
11. ……丑松は哀憐の心を起さずに居られなかつた。(43頁) 他 7例。
12. ……お志保はもう何もかも打明けて話さずには居られなかつたのである。(157頁) 他 20例。
13. ……見れば見る程、蓮太郎も、丑松も、高い気象を感ぜずには居られなかつたのである。(81頁)
14. 記者は……其の意氣を愛せずには居られないと書いてあつた。(62頁)
15. 『……どうしても其が信じられなかつた。……』(125頁) 他 3例。
16. 『……寝ても寝られない。……』(59頁) 他 3例。
17. 氷河の跡の見られるといふのは其処だ。(81頁) 他 2例。
18. 『……斯うして釣に出られるやうな日は好いが、屋外へも出られないやうな日と来ては、……』(123～124頁)
19. ……其實普通の人に堪へられる職業では無いのであつて、……。(68頁) 他 3例。

20. 「鯨、結構——それに、油汁と来ては堪へられない。……」(56頁)
21. ……車さへ来れば直に出掛けられるばかりに用意して、……。(45頁)
22. 『……まあ、若い時には能く物が出来ると言はれて、諸国から本山へ集る若手の中でも五本の指に数へられたさうですよ……』(131頁)
23. 『……奈何して彼様な手合が学問といふ方面に頭を擡げられるものか。…』(135頁)
24. なけなしの金とはいひ乍ら、精神の慾には替へられなかつたのである。(36頁)
25. ……しかも其が得られないで、……。(39頁)
26. 『……然し、恩給を受けられるといふ人は、……』(43頁)
27. ……風景は、「山氣」を通して反つて深く面白く眺められるやうになつた。(81頁)
28. その為敷居が高くなつて、今では寺へも来られないやうな始末(49頁) 他 1例。

『破戒』では、サ変動詞に可能の「られる」が付いた「……せられる」の形は、1.の「想像せられる」 1例のみである。同じサ変動詞に「られる」が付いた「……せられる」の形をとるのは、 29. の「爪弾きせられる」と30. の「せらるる(文語の形をとっている)」 2例がある。しかし、29. は「受身」、30. は「自発」の意を表している。これらは共に「……せられる」と同一形式であるため、「可能」か「受身」か、それとも「自発」か、文意を慎重に吟味しないと読み取れない。なお、サ変動詞に「られる」を付けたこの「……せられる」の形は、同時期(明治39年)の作品、夏目漱石の『坊っちゃん』には見出されなかった<sup>11</sup>。

29. 捨てられ、卑しめられ、爪弾きせられ、同じ人間の仲間入すらできないやうな、つた

<sup>11</sup>前掲「可能表現についての一考察－『坊っちゃん』の場合－」、127-146 頁。

ない同族の運命を……。(114頁)

30. さすがに幽な反射はあつて、仰げば仰ぐほど暗い藍色の海のやうなは、そこに他界を望むやうな心地もせらるゝのであつた。(66頁)

2. から6. の「居られる」は、補助動詞として使われる例である。6. の「……ても居られる」の肯定形を除いて、「……て（は）居られない」「……ても居られない」と、否定形をとって用いられている。

7. から10. の「居られる」は、独立動詞として単独に使われる場合である。11. から14. の「居られる」は補助動詞であり、「起さずに居られなかつた」「話さずには居られなかつた」「感ぜずには居られなかつた」「愛せずには居られない」のように、「……ずに（は）居られない」という固定した言い回しとして用いられる。

15. から28. は、「信じられない」「寝られない」「見られる」「出られる」「出られない」「堪へられる」「堪へられない」などと、否定形でも肯定形でも用いられるが、多くは否定の形をとる。

以上、可能の意の「られる」形75例中、会話文27例、地の文48例であり、地の文で多く用いられている。「……ない」の否定形をとるのは75例中の57例見られ、「可能」の「られる」形の場合は、打消の表現として使われる傾向がある。地の文で使われることと打消の表現として使われること、この二点に関しては同時期(明治39年)の作品、夏目漱石の『坊っちゃん』でも同じ結果が得られている<sup>12</sup>。

次に「自発」の例をあげる。8例見出された。

---

<sup>12</sup> 11に同じ。

31. ……可厭に神經質な鼻でもつて、自分の隠して居る秘密を嗅ぐかのやうにも感ぜらるゝ。(112頁)
32. あやしい運命に妨げられゝば妨げられる程、余計に丑松の胸は溢れるやうに感ぜられた。(97頁) 他 3例。
33. さあ、銀之助は友達のことが案じられる。(66頁) 他 1例。
34. ……同じ人間の仲間入すらできないやうな、つたない同族の運命を考へれば考へるほど、猶々斯の若い生命が惜まるゝ。(114頁)

先に取り上げた30.の「せらるる」を含めて31.から34.は、「気持ちの上で自然にそうなってくる」という意味である。8例は共に地の文で使われている。「自発」の「思はれる」と同様、受身形ではあるが、「自然にそうなる」という「自発」の言い方である。「二節」で述べた「れる」形の「思はれる」「思ひやられる」「惜しまれる」などの22例も同じ言い回しである。このような「自分の意志と関係なく自然と……してくる」自発の意を表すことのできるのは、「思う」「感じる」「案じる」「思い出す」「しのぶ」「悔やむ」のような心理状態を表すごく少数の動詞に限られているようである<sup>13</sup>。

<sup>13</sup> 『破戒』では「自発・可能」の「られる」形83例中の8例、「自発・可能」の「れる」形 103例中の31例、合わせて39例が「自発」の意が含まれる。「られる」形の場合に「感じられる」「案じられる」、「れる」形の場合に「思はれる」「思ひやられる」「惜しまれる」が現れる。この「自発」の「れる・られる」は曖昧な場合があるので、日本語学習者に理解しにくい。この点について板坂元氏にも同様の指摘がある。前掲『日本人の論理構造』、68-77頁。

#### 四 「可能動詞」形

『現代日本語の表現と語法』(佐久間鼎、くろしお出版、1983年増補版)は、「行ける」「言える」などの「可能動詞」には「可能」すなわち「能力」を表し、場合によって「自然」及び「価値」が含まれると述べている<sup>14</sup>。

- (a)この綱が(君に)切れるかい。(可能=能力)
- (b)この下駄は、はなおがすぐ切れるよ。(自然)
- (c)このナイフはよく切れるよ。(価値)

ここでは、(a)「可能(能力)」を表す動詞を「可能動詞」、(b)「自然にそうなる」意のものを「自発性動詞」<sup>15</sup>、(c)性能を述べ評価する場合を「価値動詞」と呼び分類する。これら

<sup>14</sup> 佐久間鼎氏は「可能動詞」を(a)「可能」すなわち「能力」を表すもの(b)「自然」(c)「価値」に分けているが、(a)では、「日本語が話せる(會説日語)」のような「能力」可能と「事情で話せない(因故不能説)」のような「状況」可能などを一括している。前掲『現代日本語の表現と語法(増補版)』、216-218頁。本稿はこの分類に従って一括して「可能(能力)」とする。

<sup>15</sup> 「この下駄は、はなおがすぐ切れる。」「ガラスが割れる。」「昨夜の火事で、家が十軒焼けた。」「嵐で木が折れた。」の「切れる」「割れる」「焼ける」「折れる」などのような、「自然にそうなる」意を持つものを動詞の自発態とする研究者もいる。寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』、くろしお出版、1982年、263-264頁及び271-284頁。一般にはそれぞれ他動詞「切る」「割る」「焼く」「折る」などに対応する「自動詞」とみなしている。

すべて同一形式をとるので、文脈によらないと区別できない。そこで、『破戒』に出てくる「可能動詞」形 138例の文意を吟味しつつ、（一）可能動詞、（二）自発性動詞（＝自動詞）、（三）価値動詞に分類してみよう。

（一）「可能動詞」の場合

「可能動詞」形 138例中「可能（能力）」の意と判断できる用例は、56例あるが、その代表例を次にあげることにする。なお、「二節」の 38. 39. 40. 41. 42. を1. 2. 3. 4. 5. として最掲する。

1. 上の渡し近くに在る一軒の餡飴屋は別に氣の置けるやうな人も来ないところ。(145頁)
2. 飲めば窮るといふことは知りつゝ、どうしても持つた病には勝てないらしい。(49頁)
3. 箫筒の上に載せて置いて行つた手紙は奥様へ宛てたもので——それは身心籠めて話をするやうに書いてあつた、ところどころ涙に染んで読めない文字もあつたとのこと。(143頁)
4. 「はゝゝゝゝ、君は直に左様怒るから不可。なにも君だと言つた訳では無いよ。真箇に、君のやうな人には戯語も言へない。」(121頁) 他 9例。
5. 有力者の家などに、悦びもあり哀しみもあれば、人と同じやうに言ひ入れて、振舞の座には神主坊主と同席に座ゑられ、すこしは地酒の飲みやうも覚え、土地の言葉も可笑しくなく<sup>つか</sup>使用へる頃には、自然と学問を忘れて、無教育な人にも馴染むものである。(41頁)
6. あゝ——書けるものなら丑松も書く。其を書けないといふのは、丑松の弱点で、とう

『破戒』に見る可能表現についての－考察

- とう普通の病気見舞と同じものに成つて了つた。(67頁) 他 1例。
7. 『……へえ、君は斯の方もなかなかいけるんだね。我輩は又、飲めない人かとばかり思つて居た。』(124頁)
8. 蓮太郎は……、また其を読者の前に突着けて、右からも左からも説明して、呑み込めないと思ふことは何度繰返しても、読者の腹の中に置かなければ承知しないといふ遺方であつた。(38頁)
9. 随つて斯の村で弁護士の政論を聞くことが出来ないが、そのかはり蓮太郎は丑松とゆつくり話せる。(80頁)
10. お志保が苦しいから帰りたいと言つたところで、『第一に、八人の親子が奈何して食へよう』と敬之進も酒の上で泣いた。(129頁) 他 1例。
11. 『だつて、校長先生、人の一生の名誉に関はるやことを、左様迂闊に喋舌れないぢや有りませんか。』(108頁)
12. 『性質だつても君、其様な判断は下せない。』(110頁)
13. 『君は好いよ。君はこれから農科大学の方へ行つて、自分の好きな研究が自由にやれるんだから。』(120頁)
14. 『いえ、頂けません。』とお志保は盃を押隠すやうにする。(164頁)
15. 『獲物無しサ。』と敬之進は舌を出して見せて、『朝から寒い思をして、一匹も釣れないでは君、遣切れないぢやないか。』(123頁)
16. 『……まあ学校の方から月給は取れるし、……』(131頁)
17. 終には談話も聞取れないことがある。(73頁) 他 2例。
18. 『折角持つて来たものです——まあ、左様言はずに、引取れるものなら引取つて下さい。』(122頁)
19. 『ですけれど、どうも貴方の御話の意味が汲取れないんですから。』(105頁)

20. これがお志保の異母の姉妹とは、奈何しても受取れない。(127頁) 他 6例。
21. なかなか細君の瘦腕で斯の家族が養ひきれるものでは無いといふことを感じた。(129頁)
22. 文平はまた何時までも心の激昂をおさへきれないといふ様子。(139頁) 他 4例。
23. 斯ういふ二人の問答を、細君は黙って聞いて居たが、もうもう堪へきれないと言つたやうな風に、横合から話を引取って、……。(129頁)
24. 『朝から寒い思をして、一匹も釣れないでは君、遣切れないぢやないか。』(123頁)

『破戒』の例で言えば、「可能動詞」形における「可能(能力)」表現の場合、動作能力のある者はほとんど文面に現れていない。しかし、文脈からはそれを察することができる。この「可能(能力)」の場合は、「誰々に何々ができる」あるいは「誰々が何々ができる」という構文で、動作の主体を表すのに助詞「に」か「が」が使われるが、56例のうち、「に」を伴う用例はない。『坊っちゃん』では、動作の主体が「に」によって表されるのは「可能(能力)」表現44例のうち25. の 1例ある。

25. 一體中學の先生なんてどこへ行つても、こんなものを相手にするなら氣の毒なものだ。よく先生が品切れにならない。餘つ程辛防強く朴念仁が成るんだらう。おれには到底やり切れない。(「坊っちゃん」76頁)

1. 「氣の置けるような人も来ない」の「置ける」は五段動詞「置く」の「可能動詞」形であるが、前述した通り、現在では「氣の(が)置けない」のように否定の形で「氣遣いする必要がない・打ち解けられる」という意味を表している。2. 「勝てる」3. 「読める」4. 「言へる」5. 「使用へる」6. 「書ける」7. 「飲める」8. 「呑み込める」9. 「話せる」10. 「食へる」11. 「喋舌れる」12. 「下せる」13. 「やれる」14. 「頂ける」は、それぞれ「勝

『破戒』に見る可能表現についての一考察

つ」「読む」「言ふ」「使ふ」「書く」「飲む」「呑み込む」「話す」「食ふ」「喋舌る」「下す」「やる」「頂く」の「可能動詞」形である。

「二節」すでに述べたが、5.の「使用へる」と「二節15.」の「費はれる」のように漢字表記の違いで「使ふ」の「可能動詞」形と「れる」形両形を使い分けている。また、7.「飲める」と8.「呑み込める」のように、「飲める」「飲み込める」と一律に「飲」をあてずに厳密に意味に応じた漢字の使い分けをしている。『坊っちゃん』では、このような使い分けをしていない(26.27.)。

26. 人の茶だと思つ無暗に飲む奴だ。(「坊っちゃん」66頁)

27. 一週間許りしたら學校の様子も一通りは飲み込めたし、宿の夫婦の人物も大概は分つた。(「坊っちゃん」66頁)

15. 「釣れない」は、五段動詞「釣る」の可能動詞「釣れる」の否定形である。16.の「取れる」、17.とその他 2例の「聞取れる」はそれぞれ五段動詞「取る」「聞取る」の「可能動詞」形であり、ほかに18.「引取れる」19.「汲取れる」20.「受取れる」3例も同様、それぞれ五段動詞「引取る」「汲取る」「受取る」の「可能動詞」形である。21.「養ひきれる」、22.とその他 4例の「制へきれない」、23.「堪へきれない」のように、補助動詞「きる」の可能動詞「きれる」は他の動詞についてできた複合動詞と区別しなければならない。

24. の「遣切れない」は、五段動詞「遣切る」の可能動詞「遣切れる」を打ち消す形であり、「がまんできない・耐えられない・かなわない」という意味である。通常この否定の形で「可能」の意味で使われるが、「この仕事は今日中には遣り切れない」の「遣り切

「れない」とは文意が違う<sup>16</sup>。したがって、常に打消の表現を伴って使われる24.の場合の「遣切れない」は、「遣切る」の「可能動詞」形「遣切れる」の否定形とみなすより形容詞的連語とみなす方が妥当であろう。

『破戒』には28. 29. のような例がある。28. 「遣りきれた訳のものでは無い」、29. 「やりきれる筈がごはせん」は結局「遣り切れない」という意味になるが、24. のように、打消の表現を伴う連語として使われる「遣り切れない」が定着する以前の表現だと考えられる。意味としては 24. の「遣切れない」と「この仕事は今日中には遣り切れない」の「遣り切れない」両者の中間にあると言えるかもしれない<sup>17</sup>。

28. 『……まあ、五人の子供に側で泣きたてられて見たまへ。なかなか遣りきれた訳のものでは無いよ。……』(59頁)

29. 『何程私ばかり焦心つて見たところで、肝心な家の夫が何も為ずに飲んだでは、やりきれる筈がごはせん。……』(129頁)

---

<sup>16</sup> 『日本国語大辞典』では、「やりきる」の可能動詞としての「やりきれる」と、連語としての「やりきれない」は、以下のように別項目に分類されている。

「やりきれる」の項目に「①さいごまでし遂げることができる。②そのまでいることができる。がまんしきれる。」と解説され例文が添えられている。「やりきれない」の項目に「①これ以上できない。やっていけない。②がまんできない。耐えられない。かなわない。」と解説され例文が添えられている。

「やりきれる」の「可能動詞」形とみなす場合、「この仕事は今日中には遣り切れない」の「遣り切れない」は「やりきれる」の項目の①の意味に当たるのに対して、24. の「遣切れない」は「やりきれる」の項目の②の意味に当たる。

<sup>17</sup> 28. と 29. の「やりきれる」は上記の「やりきる」の可能動詞としての「やりきれる」の項目の②の意味に当たると考えられる。

「可能動詞」56例では、否定39、肯定17と、否定形が多い。前述したように、いわゆる受身形の「行かれる」「言われる」などでも、「可能(能力)」を表すことができる。しかし、「可能動詞」形の「行ける」「言える」などの表現も確立しており、「受身」を表すことなく「可能」を表す。この「可能動詞」形は「れる」形との併存状態を経て、徐々に「れる」形に取って代わったと考えられる<sup>18</sup>。

このように『破戒』では、「可能」の「れる」形は述べ語数で言えば72例で、「言ふに言はれない(ぬ)」という慣用的表現19例を除いて「可能動詞」形に置き換えることができる。この19例を除いても53例あり、「可能(能力)」動詞の56例とほぼ同数である。『坊っちゃん』に比べて、『破戒』では「可能」の「れる」形が多く用いられている<sup>19</sup>。しかし、「可能(能力)」動詞も少なくない。なお、「れる」形53例中の6例は、「可能動詞」形〔「四節」の(三)の1.と「四節」の(一)の1.2.3.4.5.〕と「れる」形〔「二節」の1.2.6.7.11.15.〕の両形を併用している。ここから「れる」形から「可能動詞」形使用へ移行していく実態が観察できる。

<sup>18</sup> 坂梨隆三氏の研究などによれば、「可能動詞」は室町期に成立したと考えられ、その後江戸期に大きく勢力を伸ばし、それまでに用いられていた「れる」形との併存状態を経て、ついには「れる」形を脇に追いやるまでになったとされる。坂梨隆三「いわゆる可能動詞の成立について」『国語と国文学』46卷11号(1969年)、「江戸後期の可能動詞」『国語と国文学』(1995年1月号)と神田寿美子「見れる・出れる—可能表現の動きー」『口語文法口座3 ゆれている文法』、明治書院、1964年。

<sup>19</sup> 『破戒』では「可能」の「れる」形53例と「可能(能力)」動詞56例であるのに対して、『坊っちゃん』では8例と44例である。前掲「可能表現についての一考察—『坊っちゃん』の場合ー」、『日本語文学国際会議論文集』、127-146頁。

## (二) 「自發性動詞(=自動詞)」の場合

「自然にそうなる」意の用例は、以下72例である。

1. どうもをかしいをかしいと思って居たことは、この敬之進の話で悉皆読めたのである。

(126頁)

2. 新しい艶のある吾妻袍衣に身を包んだ其嬌嬈とした後姿を見ると、斯の女が誰であるかは直に読める。(99頁)

3. 聞いて居る丑松には其心情の偽が読み過ぎるほど読めて、終には其処に腰掛けても居られないやうになつた。(99頁)

1. 2. 3. の「読める」は「読む」の「可能動詞」形であるが、「その意味が理解できる」「心がわかる」「さとる」という意味である。「四節」(一)の3.の「ところどころ涙に染んで読めない文字もあつた」の「読める」と文意が違ひ、「自発性自動詞」として用いられていると判断できる。このような「読める」は一部の辞書では、すでに「下一段自動詞」として一項目を設けている<sup>20</sup>。

---

<sup>20</sup> 『大辞林』では、「読める」を下一段動詞として一項目を設けている。〔「読む」の可能動詞形から〕とあって、次の二つの用法に分けている。

(1) 読む価値がある。「これはちょっと読める小説だ。」

(2) その意味が理解できる。心がわかる。さとる。「君の考えは読めた。」

松村明『大辞林』、三省堂、1988年版、2505頁。

『破戒』に見る可能表現についての一考察

4. 丁度江戸表へ参勤のこと、日頃鬱積れて解けない胸中の疑問を人々に尋ね試みたことがある。(117頁)
5. 混雜する旅人の群に紛れて、先方の二人も亦た時々盗むやうに是方の様子を注意するらしい——まあ、思做の故かして、すくなくとも丑松には左様酌れたのである。(100頁)
6. 『……尤も我輩は士族だから、一反歩は何坪あるのか、一束に何斗の年貢を納めるのか、一升蒔で何俵の糲が取れるのか、一体年に肥料が何の位要るものか、其様なことは薩張解らん。……』(59頁)
7. 『……すこし是方が遠慮して居れば、何処迄いゝ氣になるか知れやしねえ。……』(54頁)
8. 『……左様貴方が言つて下されば、奈何に僕も心強いか知れません……』(158頁) 他8例。
9. 『こりや御持帰りに成りやした方が御為かも知れやせん。』(122頁)
10. 『ひよつとすると、僕も君の方まで出掛けて行くかも知れません。』(96頁) 他16例。
11. しかし、言葉を交して居るうちに、次第に丑松は斯人の堅実な、引き締まつた、どうやら底の知れないところもある性質を感得くやうに成つた。(163頁)

4. 「解ける」は「自動詞」として「わからなかつた筋道が明らかになり、問題や疑問の答えが見つかる」意に用いられている。
5. 「酌れる」は「そのように理解される」「そう解釈できる」、6. 「取れる」は「収穫・捕獲される」という意味である。この場合の「酌れる」「取れる」は『坊っちゃん』に

出てくる「自発性動詞＝自動詞」として使われる「釣れる」例12.<sup>21</sup>と同様、五段動詞「とる」の「可能動詞」形「とれる」と同一形式ではあるが、共に「自動詞」として用いられている<sup>22</sup>。

12. しめた、釣れたとぐいぐい手繰り寄せた。おや釣れましたかね、後世恐るべしだと野  
だがひやかすうち、糸はもう大概手繩り込んで只五尺ばかり程しか、水に浸いて居ら  
ん。（「坊っちゃん」84頁）

7. 8. 9. 10. 11. の「知れない」は、「自動詞」の「知れる」を打ち消す形である。7. 8. は「どんなに……か知れない」の形で「非常に……するであろう」という予測や、「非常に……した」ということを表し、9. 10. は「かも知れない」の形で「可能性はあるが不確実である」という意を表し、連語として用いられる。11. の「底の知れない」は「際限がわからぬ」という意を表し、この「知れない」は「話し手にそのことがわからない」という意味であり、一般に「……の(が)知れない」と否定形で用いられる。「気の(が)知れな

<sup>21</sup>すべてを通覧したわけではないが、五段活用動詞「釣る」の「可能動詞」形「釣れる」とは別に、「釣れる」を下一段活用の自動詞として一項目を設けているのは、『新明解国語辞典』第四版と『学研国語大辞典』の二冊である。

<sup>22</sup>すべてを通覧したわけではないが、辞書では、すべて五段活用動詞「とる」の「可能動詞」形「とれる」とは別個に、下一段活用の自動詞「とれる」に一項目を設けている。松村明『大辞林』三省堂1988年版。新村出『広辞苑』第二版岩波書店1969年版。金田一京助ほか3名『新明解国語辞典』第四版三省堂1989年版。林四郎ほか3名『例解新国語辞典』第三版三省堂1990年版。金田一春彦・池田弥三郎『学研国語大辞典』学習研究社1978年版。

い」「正体の(が)知れない」などと同様、一つの慣用表現である。このような自動詞としての「知れる」は「可能」から転移してきた表現であるものの、五段動詞「知る」の「可能動詞」「知れる」とは別語である<sup>23</sup>。

13. 『左様です。僕にも有やすが、其は知れたもんです。』(129頁)
14. 何か斯う物を考へ考へ歩いて行くといふことは、其の沈み勝ちな様子を見ても知れた。(134頁) 他14例。
15. 『だつて、言葉で知れなくたつて、行為の方で知れます。……』(137頁) 他 6例。
16. 『……卒業する迄も其が知れずに居るなんてことは、寄宿舎生活は許さないさ。……』(121頁) 他 3例。
17. 『ホウ、言はない事が奈何して君に知れる?』(137頁)
18. 『……それに、斯ういふことが世間へ知れた以上は、何処の学校だつても嫌がりますさ——まず休職といふものでせう。』(153頁)
19. 暗くなつてから、人知れず宿屋へ逢ひに行かう。斯う用心深く考へた。(142頁) 他 4例。
20. どうかすると、女は高柳の耳の側へ口を寄せて、何か人に知れないやうに私語くこと也有つた。(100頁)
21. 『……。しかしねえ、もし其が事実だとすれば、今迄知れずに居る筈もなからうちやないか。最早疾に知れて居さうなものだ——師範校に居る時代に、最早知れて居さう

<sup>23</sup> 「知れる」も「とれる」と同様、上記の辞書に関する限りすべて五段活用動詞「知る」の「可能動詞」形「知れる」とは別個に、下一段活用の自動詞として一項目を設けている。

なものだ。」(111頁)

22. 『……。若し吾儕の中に其様な人が有るとすれば、師範校時代にもう知れて了ふね。  
……』(121頁)

13.～22.の「知れる」は「自発性動詞」として用いられている。

13.の「知れたもの」は「たいしたものではない」即ち「少ない」、14.15.の「知れる」は「わかる」という意味である。16.の「知れず」は14.15.の「知れる」を打ち消す形であり、「わからない」という意味である。

17. 「奈何して君に知れる？」は「奈何して君に分かる？」という意味であり、どちらかというと、「可能」に近いように思われる。

18. 「世間へ知れた以上は」は「世間へ（に）知られた」という意味であろう。19. 「人知れず宿屋へ逢ひに行かう」20. 「人に知れないやうに私語くことも有つた」の「知れる」は「可能」というより「受身」の意に近いように思われる<sup>24</sup>。

21. 「最早疾に知れて居さうなもの」22. 「もう知れて了ふね」の「知れる」は「人に自然と知られる」という意味である。

これらの「知れる」も7.～11.の「知れる」と同様、独立語(一語の自動詞)として用いられており、「知る」の可能動詞「知れる」とは違う。ちなみに、『破戒』には、「……

---

<sup>24</sup>井上まゆみ氏は、「人に知れる」の「知れる」の用法(下二段活用、後に下一段活用に)は古く『万葉集』にも見える(「人に知れつつ」と出ている)が、受身の意であったと分析し、『源氏物語』『平家物語』に「人知れず」「人知れぬ」の二形が存在し、いずれも可能の意ではないと述べている。井上まゆみ「助動詞「る」「らる」と可能動詞の関連について」『香川大学国文研究』4号、1979年。

## 『破戒』に見る可能表現についての一考察

「知られる」の形で現れた用例は23. 24. 25. の3例がある。この「知られる」は受身形であり、「みんなが知っている、有名な」の意味である。

いずれにしても、「知られては困る事が多くの人の知る所となる」という意味においては18. 19. 20. 21. 22. の「知れる」に共通している。

23. それから足掛三年目の今日、丑松はたゞ熱心な青年教師として、飯山の町の人に知られて居るのみで、実際穢多である、新平民であるといふことは、誰一人として知るものが無かつたのである。(35頁)

24. 肥大な老紳士は、かねて噂に聞いた信州の政客、この冬打って出ようとしている代議士の候補者の一人、雄弁と侠氣とで人に知られた弁護士だった。(72頁)

25. 多くの善良な新平民はこうして世に知られずに葬り去らるのである。(52頁)

以上から、「可能」の意をもって「自発」を、または「受身」の意をもって「自発」を表す場合があり、「可能」と「自発」または「受身」と「自発」では意味的に連続していることがわかる。

### (三) 「価値動詞」の場合

「価値」の意と見ることのできる用例は、以下の12例である。

1. 『……へえ、君は斯の方もなかなかいけるんだね。……』(124頁) 他 1例。

2. 『左様君のやうに言つても困るよ。』と準教員は頭を搔き乍ら、『何も僕が<sup>いけない</sup>不可と言つた訳では有るまいし。』(165頁)

3. 『それなら何故学校で不可と言ふのかね。』と銀之助は肩を動つた。(165頁) 他 2例。
4. 『……ない (なあと同じ農夫の言葉) 、省吾さん、貴方もそれぢや*いけやせん*。……』(54頁)
5. 『其時は、和尚さんを独りで遣つては不可といふので——……』(131頁)
6. 「そもさん。」——『彼様いかなければ*不可ませんねえ*。』(118頁)
7. 『貴様これへ入れろ——声掛けなくちや御年貢で無くて不可。』(129頁)
8. 『……。其人の前で、私に帰れなんて——すこし省慮の有るものなら、彼様なことの言へた義理ぢや無からう。……』(94頁) 他 1例。

1. の「いける」は、「酒が相當に飲める」という意味である。この「いける」は五段動詞「行く」の「可能動詞」形であるが、仮名書きで「相當な水準にまで達している」という意を表し、「下一段自動詞」として用いられる。「頭の切れる人」「うちの親父は話せる」の「切れる」「話せる」、また、8. の「言へる」なども同様である。これらは、五段動詞「行く」「切る」「話す」「言ふ」などの「可能動詞」形の「行ける」「切れる」「話せる」「言へる」とは別個に、下一段自動詞として「いける<sup>25</sup>」「切れる」「話せる」「言へる」と表現される。

2.~7. の「いけない」は、場合によって「不可」「不可ません」と漢字をあてて用いられているが、「よくない」「だめだ」「許されない」という意味である。通常「(……

<sup>25</sup> 「価値」の「いける」は、五段動詞「行く」の「可能動詞」形「行ける」から派生したもので、下一段動詞として「相當な水準にまで達している」意を表している。この「いける」は、可能の意味を残しながら別義を生じ別語のように意識される場合である。前掲「動詞の問題点」『品詞別日本文法講座動詞』、141-142頁。

は)いけない」「……では(じゃ)いけない」「……てはいけない」「……なければ(なくては)いけない」と仮名書きで使われ、慣用的な言い方となっている。多くの辞書は「よくない」の意で親見出しとしている。1.の「いける」も同様である。このような「いけない」は、「行く」の可能動詞「行ける」に打消の助動詞「ない」の付いたものとあるが、意味から考えれば、「下一段自動詞」として用いられる「価値動詞」の「いける」に、打消の助動詞「ない」が付いたものと見るのが妥当であろう。

これらは、「可能動詞」形と同じ形式であるが、「可能」表現と一脈相通じるところがありながら、ここでは物や人物を評価している。この場合、受身形「行かれる」「言われる」などに置き換えることはできない。これらは可能の意味を残しながらも、別義を生じ、別語として意識されるようになったものであろう。したがって、これを「可能(能力)」動詞として一律に取り扱うべきではない。

## 五 結語

可能表現の歴史に関する研究によれば、「可能動詞」形は室町期に成立し、その後江戸期に大きく勢力を伸ばし、「れる」形との併存状態を経て、「れる」形を脇に追いやるまでになったとされる。神田寿美子氏の文献調査<sup>26</sup>によれば、「れる」形に対する「可能動詞」形の使用は明治中期ごろから多くなり、明治末までに急激に増加し、その後も増え続けて、現代東京語では「れる」形がほとんど用いられなくなったと言う。さらに加藤和夫氏の追跡調査によれば、現代東京語においては「可能動詞」形が「れる」形を凌駕しているが、「れる」形は完全に姿を消しているわけではなく、「行く」「蹴る」「帰る」「走

<sup>26</sup>前掲「見れる・出れる—可能表現の動きー」『口語文法口座3 ゆれている文法』。

る」のいくつかの「れる」形の力の強い語が根強く使用されていると報告している<sup>27</sup>。

本稿は、「可能動詞」形がほぼ定着していると思われる明治後期の文学作品『破戒』の用例をもとに、可能表現の「れる」形、「られる」形と「可能動詞」形の使用状況を、私の分析した同年代の文学作品『坊っちゃん』のそれと比較しつつ考察した。その結果、可能表現の「れる」形と「可能動詞」形とのかかわり合いに関して、次のことが明らかになった。

1. 『破戒』では、「可能」の「れる」形は地の文で多く用いられ、打消の表現として使われる傾向がある。「可能動詞」形と並んで、可能表現としての「行かれる」「置かれる」「寝付かれる」「縁付かれる」「見渡される」「勝たれる」「読まれる」「望まれる」「入られる」「眠られる」「言はれる」「逢はれる」「費はれる」「住まはれる」「思はれる」「争はれる」の16語は依然として用いられている。また、その中で、可能表現としての意味上のずれや表現上の違いは多少見られるが、「行かれる」—「いける」、「置かれる」—「置ける」、「勝たれる」—「勝てる」、「読まれる」—「読める」、「言はれる」—「言へる」、「費はれる」—「使用へる」のよう

---

<sup>27</sup> 加藤和夫氏の調査では、「行く」「蹴る」については「れる」形がまだ根強く使用されていると言う。また、五段動詞における「可能動詞」化の度合いと音環境の関わりについては、CiCu（「行く」「走る」。Cは子音を、小文字は母音を表す）、CeCu（「蹴る」「帰る」）の環境にあるものが、CaCu（「話す」）、CoCu（「泳ぐ」「読む」）、CuCu（「吸う」）よりも「れる」形を残しやすい傾向を確認したと報告している。加藤和夫「現代首都圏女子大生における可能表現使用の一実態」『和 洋国文研究』23号、1988年。

## 『破戒』に見る可能表現についての一考察

に、同一作品中に両形併用語も見出されている。ここでは、「行かれる」—「いける」の1例を除いて両形に意味上の違いが見られない。そして、会話文と地の文において両形は特に使い分けられていない。

一方『坊っちゃん』では、「可能」の「れる」形は地の文と会話文の両方(ほぼ半々)で用いられ、多くは肯定形であり、打消の表現として使われる傾向が見られない。『破戒』に比べて数は少ないが、「可能動詞」形と並んで、可能表現としての「行かれる」「暮される」「胡魔化される」「張り飛ばされる」「云はれる」「逢はれる」「思はれる」の7語は依然として用いられている。その中で、「行かれる」—「行ける」、「暮される」—「暮せる」、「胡魔化される」—「胡魔化せる」、「云はれる」—「云へる」、「思はれる」—「思へる」のように、同一作品中に両形併用語も見出されている。ここでは、両形に意味上の違いが見られず互いに置き換えることができる。そして、会話文と地の文において両形が特に使い分けられていないのは『破戒』と同様である。

2. 「費はれる」—「使用へる」のように、漢字表記の違いによって「れる」形と「可能動詞」形を使い分けている<sup>28</sup>。これは、可能の意の「れる」形が「可能動詞」形との併用の中でやはりそこに意味の違いを持たせようという意識が働いているためかもしれない。ところが、『坊っちゃん』には漢字の違いで両形を使い分ける表現は見られない。

3. 可能表現の「れる」形から「可能動詞」形への推移があるが、それとは別に「自発性

<sup>28</sup> これは、金を使う場合に「費」、もの（ここでは「言葉」）を使う場合に「使用」をあて意味に応じた漢字の使い分けをしているとも考えられる。これについてほかに同じ使い方の用例はないか、調べる必要がある。

動詞」と「価値動詞」として使われる「読める」「知れる」「いける」「言へる」などのような下一段自動詞が存在している。これについては『坊っちゃん』にも同様、「切れる」「釣れる」「知れる」「いける」などのような下一段自動詞が存在している。

『破戒』では、『坊っちゃん』と同様、「読まれる」—「読める」、「置かれる」—「置ける」、「言われる」—「言える」のような、両形併用語の発見は興味深い。この発見から明治後期に可能表現の「れる」形から「可能動詞」形への移行が示唆されるからである。また、五段動詞の「れる」形から「可能動詞」形そして「可能動詞」形から「自発性動詞(=自動詞)」へ、つまり「受身」から「可能」そして「可能」から「自発」への移行の実態が観察できた。また「思はれる」のような、「可能」と「自発」の意味的な連続と相違、「知れる」のような、「受身」と「自発」の意味的な連続と相違が明らかになった。

私たち日本語学習者は五段動詞の「れる」形と一段動詞・カ変動詞・サ変動詞の「られる」形の「受身・可能・自発・尊敬」の意味用法の使い分けは至極困難である。幸いに五段動詞における可能表現の「れる」形の「可能動詞」化が進み、「可能動詞」形がもっぱら「可能」、「れる」形が「受身」「自発」「尊敬」の意を表すようになり、「れる・られる」の使い分けは、幾分簡略化している。しかし、明治後期以降の文学作品などの文章には、『破戒』のように、可能の意味としての「れる」形と「可能動詞」形がほぼ拮抗している。しかも、可能動詞化された「可能動詞」形が可能の意味のほかに、「自発性動詞」などとして使われる場合もある。「自発」の意味が加わると、一層日本語の難しさが増す。したがって、日本語学習者が、文学作品の読みを深めるには、このような意味の類似と相違を明らかにする等の考察が必要になるのである。

『破戒』に見る可能表現についての一考察

(付記) 本稿を執筆するに当たっては、恩師、元東京外国大学日本語学科の阪田雪子先生には、懇切なご指導を仰ぐことができた。厚くお礼申し上げる。

<参考文献>

- 1: 神田寿美子(1964)「見れる・出れる—可能表現の動きー」『口語文法講座3 ゆれている文法』、明治書院。
- 2: 現代日本文学大系13『島崎藤村（一）』(1968)初版第1刷、筑摩書房。
- 3: 坂梨隆三(1969)「いわゆる可能動詞の成立について」『国語と国文学』46巻11号。
- 4: 橋本進吉(1969)『助詞・助動詞の研究』、岩波書店。
- 5: 新村出編(1969)『広辞苑』第二版、岩波書店。
- 6: 板坂元(1971)『日本人の論理構造』、講談社。
- 7: 松村明編(1971)『日本文法大辞典』、明治書院。
- 8: 三上章(1972)復刊、『現代語法序説—シンタクスの試み』、くろしお出版。
- 9: 鈴木丹士郎(1972)「動詞の問題点」『品詞別 日本文法講座動詞』、明治書院。
- 10: 『国語学辞典』(1973)22版、国語学会編、東京堂。
- 11: 金田一春彦・池田弥三郎(1978)『学研国語大辞典』、学習研究社。
- 12: 井上まゆみ(1979)「助動詞「る」「らる」と可能動詞の関連について」『香川大学国文研究』4号。
- 13: 三上章(1979)『日本語の構文』、三省堂。
- 14: 日本近代文学大系25『夏目漱石Ⅱ』(1980)、角川書店。
- 15: 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』、くろしお出版。
- 16: 金田一京助・他 7名(1982)『日本国語大辞典最新版』、小学館。

- 17: 佐久間鼎(1983)復刊、『現代日本語の表現と語法（増補版）』、くろしお出版。
- 18: 加藤和夫(1988)「現代首都圏女子大生における可能表現使用の一実態」『和洋国文研究』23号。
- 19: 松村明編(1988)『大辞林』、三省堂。
- 20: 金田一京助他編(1989)『新明解国語辞典』第四版、三省堂。
- 21: 林四郎他(1990)『例解新国語辞典』第三版、三省堂。
- 22: 宮島達夫・仁田義雄編(1995)『日本語類義表現の文法（上）単文編「思エルと思ワレルー自発か可能かー」』、くろしお出版。
- 23: 坂梨隆三(1995)「江戸後期の可能動詞」『国語と国文学』 1月号。
- 24: 林綺雲(1998) 5月、「可能表現についての一考察－『坊っちゃん』の場合、『日本語文学国際会議論文集』中華民国日本語教育学会、127-145頁。
- 25: 林綺雲『明治後期から大正期にかけての可能表現の変遷についての考察－可能の意味の「れる」形と「可能動詞」形とのかかわり合いを中心に－』、『解釈』11・12月号第44巻、32-39頁。
- 26: 新潮文庫・角川文庫・岩波文庫の各文庫本。

# The exploration of “kanoo” expression in 『hakai』

Chi-Ying Lin

## Abstract

The article uses Simazaki. tooson's 『hakai』 which was in the same period as Natsume, sooseki's 『bocchan』 as an example to deal with “rareru” and “kanoodoosi”.

The conclusion I've got is the same as what I've got in my research about Natsume, sooseki's 『bocchan』 and I got a few examples that could show the evolution from “reru” to “kanoodoosi”. The evolution did happen but some of the “kanoo” expression's type “reru” were still used as before.

Does it mean all the works in late Meiji show the same trend of evolution? As long as the novelists' characters are different, there will be differences between them. This will be explored in future studies.

Key words: “kanoo” expression “reru” “rareru” “kanoodoosi” evolution